

# 上方文藝研究

## 第11号

- 外濠を埋めてかかれ —「西鶴をどう読むか」の全体講評者として— …… 濱田啓介 (1)
- 『好色一代男』「おもくさ」考 —忍頂寺務の指摘をてがかりに— …… 福田安典 (7)
- 『以敬齋聞書』における四つ仮名識別法の再検討 …… 山田昇平 (16)  
—「つめて少し鼻へかけて濁る」をめぐる—
- 岩崎文庫所蔵「釈澄月書簡」(加藤景範宛)の紹介 …… 浅田 徹 (27)  
—有賀長因から長収への相承—
- 近世後期の上方における和歌の宗匠たち …… 加藤弓枝 (43)  
—名古屋市蓬左文庫所蔵『宗匠家談話』解題と翻刻—
- 富川吟雪『晴宗有明琵琶』と上方読本『垣根草』 …… 有澤知世 (55)  
—附『晴宗有明琵琶』翻刻—
- 長岡京市正木彰家文書の詩稿について(二) …… 新稲法子 (71)
- 連載 上方文藝への招待 (3)
- 報告「ワークショップ 西鶴をどう読むか(続)」 …… 浜田泰彦 (83)

# 長岡京市正木彰家文書の詩稿について(二)

新 稲 法 子

前号に掲載された拙稿「長岡京市正木彰家文書の詩稿について」(注1)は、京都府長岡京市の正木彰家文書の詩稿について紹介しその概要を述べたものである。当該資料の一部(請求番号1-7-1-17-14(1-7-2を除く))について調査しその情報を報告したが、これに続いて新たに調査した1-7-5-1-7-9について本稿で報告したい。

この詩稿を含め正木彰家文書には既に目録が備わっているが、詩稿については数種が一綴になったものがほとんどで、前稿と同じく一冊ずつ年月日や批閲者などの情報を加えて別表を作成した。

また前稿では正木彰家文書の所有者であった正木安左衛門(号聳山、以下聳山と記す)と聳山の所属した共研唸社・嚶求唸社という詩社について、指導者と添削の実態についても概要を述べたが、本稿はこれを受け、それぞれの詩社の活動時期と盟主について明らかにするものである。

## 1 共研唸社の創設

前稿では聳山等の指導に当たった人物として、添削された詩稿の署名から宇田栗園(二八二六-一九〇二)・江馬天江(二八二五-一九〇二)の他中島静甫・久保雅友・櫻井桂村(二八二八?)を挙げたが、今回の調査で大竹蔣逕が加わった。1-7-5-④にある大竹温という署名が蔣逕である。

大竹温、名は温、通称万吉、蔣逕(以下蔣逕と記す)、知新と号す。遠江の人で、小野湖山や江馬天江らに学び、詩集に「蔣逕微吟」「松竹幽居小稿 附唱和詩」「松竹幽居第二集」がある。蔣逕は神田香庵と共に天江の詩集「退享園詩鈔」に掲載する詩の抄出を任せられ、天江もまた蔣逕の詩集に序文や評語を寄せるなど、天江の弟子の中でも別格の存在であった。江馬天江は宇田栗園と並んで多くの詩稿を添削しているが、天江と蔣逕の師弟としての結びつきを考えると、

蔣逕を共研吟社に紹介したのはおそらく師の天江であろう。一方で蔣逕は櫻井桂村の『熙春堂詩鈔』に評を寄せていることから、この二人もまた既知の間柄であったことがわかる。

さて、これら指導者の中で誰が共研吟社・嚶求吟社を主宰した盟主なのであるか。『長岡京市史』(注2)などには聳山らが漢詩を愛好したという記述はあるが、これまで詩社の盟主は特定されていなかった。聳山はその作品の出来栄えから明治の乙訓地方を代表する詩人の一人であるといつてよく、詩社の活動に寄与する所非常に大きなものがあつた。共研吟社・嚶求吟社の詩稿の多くが正木彰家に伝わっていたこと自体が、詩社における聳山の存在の大きさを示しているだろう。ただ正木彰家文書の詩稿を確認する限りでは、聳山は添削などの指導はしていないようなので、盟主というわけではない。

結論からいえば、共研吟社・嚶求吟社のうち、共研吟社に関しては盟主は宇田栗園である。前稿発表後、『西岡風雅』(注3)という乙訓地方の詩人たちが刊行した詞華集を見ることができた。宇田泰による序文には、次のようなくだりがある。

初文久元治間、家君方家居無事、教授之暇、與諸同輩及從游諸子以詩相唱和、一時傳爲盛事、及明治維新之際、家君奉徵出仕于朝移住於京、同人皆以爲壇坫無主無由取正、會遂廢矣、近歲同人憾之、愆有以接前緒、於是新結社、名曰共研、每月一集、從事於吟咏、仍取正家君、如此者數年矣、頃者社中相謀將集刻其詩以頌同好、乃選其佳者得絕句若干首、又索二三先輩之詩、緝爲一冊、名曰西岡風雅、以家君之故囑泰序之

初め文久・元治の間、家君家居無事に方たり、教授の暇、諸同輩及び從游せる諸子と詩を以て相唱和す。一時伝へて盛事と爲す。明治維新の際に及びて、家君徵を奉り朝に出仕し京に移住す。同人皆以て壇坫主無く取正由る無きと爲し、会遂ひに廢す。近歲同人之を憾み、以て前緒に継ぐこと有らんと欲す。是に於いて新たに社を結び、名づけて共研と曰ふ。毎月一たび集ひ、吟咏に従事し、仍ち家君に正を取る。此くの如き者數年なり。頃者、社中相謀りて將に其の詩を集め刻し、以て同好に頌けんとす。乃ち其の佳なる者を選び絶句若干首を得、又二三先輩の詩を索め、緝して一冊と爲す。名づけて西岡風雅と曰ふ。家君の故を以て泰に囑して之に序せしむ。

宇田泰は栗園の歌集『栗廼花』を上梓した豊四郎と同一人物であろうか。これによると、栗園は、何らかの詩社を結成していたのかどうかははっきりしないが、幕末に乙訓地方で仲間や弟子と漢詩を詠む会を持っていた。明治以降は新政府に出仕するため京都市内に移り住んだので、会は解散した。最近になってそれを残念に思った同人たちが再結成し、「共研」と名付けた……という。まさに、「共研吟社」についての記述である。共研吟社の盟主が宇田栗園である証左と言えるだろう。

正木彰家文書177-1の栗園が批閱した詩稿は明治十一・十三年のものである。明治十五年に記されたこの序文と時期的に一致する。『平安人物誌』に做つて作られた「向日里人物志」(注4)に宇田家の一族が多出することからわかるように、儒医宇田家は乙訓地方の

様々な文化を牽引する立場にあった。聳山が宇田一族の宇田退蔵に漢学を学んだことを鑑みれば、共研吟社もまた宇田家の主宰で始まったのは自然なことである。

宇田家の人物の中でも栗園は梁川星巖門下で学び、詩を善くした。その端正な詩風が窺われる作品を一つ挙げておこう。

### 山茶初華

山茶初めて華さく

雨葉鱗鱗翠色新

雨葉鱗鱗 翠色新たなり

梅花頭上別成春

梅花の頭上 別に春を成す

歳寒勁節誰相知

歳寒くして勁節 誰れか相い知らん

一片丹心吐向人

一片の丹心 人に向かひて吐く

〔静観亭遺稿(注5)所収〕

人々が好んで詠む梅花の向こうにひっそりと咲く野生の茶の花。「歳寒くして然る後に松柏の彫むに後るるを知る」(論語 子罕)というように、節を守る喩えとしては冬の寒さにも変わらぬ松柏がよく用いられるが、地味な茶の花に着目した所に栗園の人柄が偲ばれる。結句の「人」は詩人栗園を指す。茶の木は同じように節を守る生き方をしている栗園なら気付いてくれるだろうと、その花を栗園に向けて咲かせたというのである。

栗園は同じく星巖門下で絶句竹外と称された藤井竹外と仲がよかつたという。谷鉄臣は二人について、竹外は酒、栗園は茶を好み、それぞれの人柄が詩に表れているといい、

竹外看他人詩、至其好處、便叫妙。君則稱好。君之稱好與竹外

叫妙、共爲詞林佳話。

竹外 他人の詩を看るに、其の好き処に至れば、便ち妙と叫ぶ。君は則ち好しと称す。君の好しと称すと竹外の妙と叫ぶと、共に詞林の佳話爲り。

〔静観亭遺稿〕跋

と対称的な二人が詩壇で話題になっていたことを伝えている。

〔西岡風雅〕には栗園と江馬天江が題辭を寄せているが、栗園の「西岡風雅題辭 其の三」に注目したい。

謬向吟壇作主盟

謬まりて吟壇に向いて主盟と作り

恍然一夢十餘春

恍然一夢十餘春

故園風雅今如此

故園の風雅 今此の如し

且喜斯文有替人

且つ喜ぶ斯文に替人有るを

〔西岡風雅〕、「静観亭遺稿」にも所収

この初句で「謬りて吟壇に向いて主盟と作り」、則ち「吟壇(詩壇)」で「主盟(盟主)」だったというのは、幕末の乙訓地方の漢詩壇を牽引し、明治になって共研吟社の詩人たちを指導していたことを栗園自らが詠んでいるのである。

## 2 宇田家から天江へ

ところで「西岡風雅題辭 其の三」で詩社を作ったことを「謬りて」と詠んでいるのは、栗園が漢詩から和歌に転じていたからであ

る。これは正木彰家文書の詩稿で批閱者として栗園の名の見える詩稿は明治十一・十三年という比較的早い時期のものしかないことと一致する。

栗園の漢詩を見ることのできる「静観亭遺稿」は、栗園の意に沿わないことは承知しながらも、門弟がその詩の埋もれることを惜しんで十周忌に編んだものであった。中野太郎の「宇田栗園先生行状」(「静観亭遺稿」)には、

晩年不作詩。曰詩非我固有。陽春白雪。和者愈少。不足恠也。於是專作和歌。蓋詩學所蘊。發爲永言。性靈流露。琅琅可誦。奉旨爲京都華族歌道監督。

晩年詩を作らず。曰く、詩は我が固有に非ず。陽春白雪、和する者愈いよ少なきこと、恠しむに足らざる也と。是に於いて専ら和歌を作る。蓋し詩學に蘊する所、発して永く言と爲す。性靈流露し、琅琅誦す可し。奉旨して京都華族歌道の監督と爲れり。

と栗園の言葉として、漢詩は日本独自のものではなく、詠む者も少なくなるだろうと云って和歌に移ったことを記している。ここにいう「京都華族歌道監督」とは、明治天皇が維新後の京都の凋落を防ぐために主宰した歌会の幹事のこと、その歌会は栗園が向陽会と名付け、現在も続いているという。

栗園が漢詩から和歌に転向した正確な時期は不明だが、向陽会の幹事を務めたのがきっかけで和歌を詠むようになったというわけはないだろう。「行状」の文章はそれ以前のように読めるし、漢詩

は一流とはいえ歌壇では無名の素人がいきなり歌会の幹事を務めることは通常では考え難いからである。

それにしても一時は藤井竹外と並び称されるほどの詩人であった栗園が漢詩を見限ったことは、栗園の人物像や明治の漢詩壇の状況を考える上で興味深いものがある。合山林太郎氏は、

しかし、明治二二年、「於母影」において、洋詩の漢詩訳を試みた鷗外が、明治三〇年に「漢詩は有体にいは、早晚亡びる」(「今の文学界」)「太陽」三巻三号、明治三〇年二月、「鷗外全集」三八巻、岩波書店、一九七五年、一四八頁)と発言していることは注目されよう。漢詩は新しい時代の詩歌の候補としての地位から脱落し、以降は、新体詩など他ジャンルが詩想を得るための源泉として、すなわち、制作される文芸としてよりは、鑑賞される文芸として扱われるようになる。(注6)

と明治三〇年に森鷗外が漢詩は滅ぶと予言したことを指摘しているが、「西岡風雅」が成立した明治十五年には漢詩が衰退すると予測していた栗園の先見性は、評価されるべきものと思われる。

いずれにせよ、栗園自身は漢詩から離れたが、共研社という種を蒔いたことで乙訓地方に「故園の風雅今此の如し」(「西岡風雅題辞」)と歌うまでに作詩を嗜む人々が育ったのであった。

「西岡風雅題辞」は「且つ喜ぶ斯文に替人の有ることを」と詠み終えているが、共研社に於いて「替人」つまり栗園の代わりとなった人物は誰であろうか。

共研社には栗園以外にも宇田家の人たちが参加していたが、そ

の中に宇田研谷という人物がいる。日浅忠行氏の詳細な調査によると、研谷と号したのは長法寺宇田家の宇田郁太郎（？）一九〇五）である（注7）。批閱者不明の明治三十四年の詩稿1-7-4①②にはま

るで批閱者のような「研谷閱了」という署名がある（注8）。『西岡風雅』序文には「同人皆以て壇坫主無く取正由る無きと為し、会遂ひに廃す」とあり、栗園のいない状態を詩壇のあるじがおらず作詩の基準がなくなつたと記している。この「閱了」という表現は添削指導をしたという意味ではないだろう。しかしこの目立つ署名は、研谷が他の詩人と異なつて別格の扱いを受けていたことや、宇田家の影響の大きさを窺わせる。

指導者として栗園の後を継いだのは、「西岡風雅」に題辭を寄せていること、また詩稿の添削の量からいえば江馬天江であろう。しかしながら、宇田家の人々のように乙訓地方出身でない江馬天江が、どの程度共研吟社に愛着を持ち力を注いでいたかは定かではない。その詩集『退亨園詩鈔』（注9）を繕いても、天江が自らを共研吟社を含む何らかの詩社の盟主として意識していた痕跡は見いだせない。天江の詩は元知元年の禁門の変によるいわゆる「どんどん焼け」でその多くが失われた上、残された三千余首から分量として十分の一の三百首を選ばせたのが『退亨園詩鈔』であるから、詩社にまつわる作品が残っていないかたがないことではあるのだが。

ただ確かなことは、共研吟社の詩人たちにとつて地元の栗園を失つたことは決してマイナスではなかつたことである。それどころか、江馬天江という当代一流の詩人の知遇を得、指導を仰いだことは、地域のサロンの集まりから外へ目を向け、作品の水準を上げるよい機会として作用したことであろう。

### 3 共研吟社末期

栗園、天江に続く批閱者である中島静甫・久保雅友・櫻井桂村・大竹蔭逕らについては、いずれも共研吟社の盟主であつたとは言いがたい。詩稿に記された年月日によると、この四人が添削した時期は重なっているからである（この共研吟社末期の詩稿の中で大竹蔭逕批閱の1-7-5④のみ「共研吟社」の語がない）。これは明治三十四年に栗園・天江という盟主を相次いで失つた共研吟社が、新しい盟主を求めめぼしい人物に添削を依頼していたことを表しているのではないだろうか。

栗園（図1）・天江（図2）は、特に天江は最晩年だったためもあるのかもしれないが、比較的あっさりとした添削であるのに対し、末期の批閱者の添削からは熱意が伝わってくる。たとえば、蔭逕の場合、語句の訂正や平仄の間違ひの指摘の他、眉上にびっしりと更に詳しい解説や作品を評価する言葉が添えられている（図3）。栗園・天江の場合なら点を打つか甲乙順の「甲」の一文字で済ませる所を、

語ハ陳套ト雖トモ完作ト稱スベシ

是亦完壁前者ト軒輊シ易カラズ

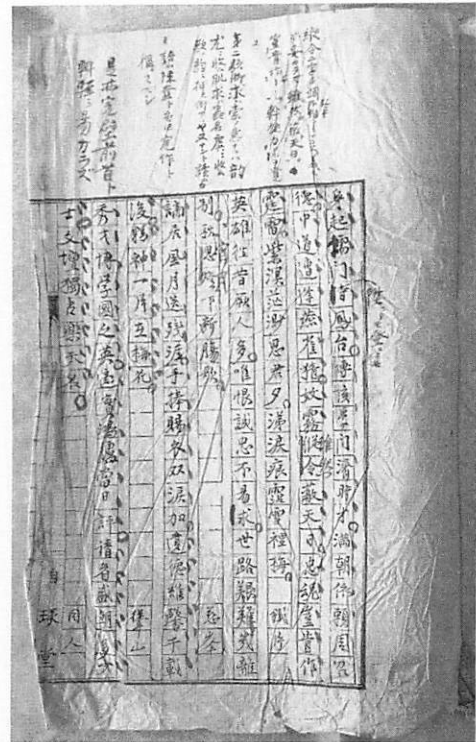
と言葉を尽くして褒めているのである。「陳套」は陳腐かつ常套であること、「軒輊」は優劣。



[図1] 1-7-1③栗園の添削



[図2] 1-7-5①天江の添削



[図3] 1-7-5④蔣逵の添削

しかしながら、このような熱心な添削にもかかわらず、聳山たちは後継の主宰者を決定することはできなかったらしい。「共研吟社」と記された詩稿は明治三十五年のものを最後に途絶えているので、宇田栗園によっておそらく明治十一年ごろ創設され、栗園の和歌転向後に江馬天江が引き継いだ共研吟社は、栗園・天江という偉大な両指導者が没した翌年にいったん解散したのではないかと考えられる。

#### 4 嚶求吟社の誕生

転換期である明治三十五年の共研吟社詩稿は1-7-5①②③⑤と1-7-6が櫻井桂村、1-7-5④が大竹蔣逵によって添削されている。亡くなった江馬天江の弟子である蔣逵が後継者として迎えられ

〔表1〕【請求番号1-7-5】 共研噺社詩稿 寸法27.9×19.7センチ（最大）  
（一綴。便宜上、最大のものを示した。）

	表紙	年月日	丁数	批閲者	添削記号 など	備考
①	明治卅五年二月九日/ 大政/共研噺社拝草	明治三十五年	四丁	櫻井桂村	甲乙、 一二。	回覧の覚え書きあり。
②	なし		七丁	櫻井桂村 (前半)、 中島静甫 (後半)		こんにやく版。前半は1-7-5①、後半 は1-7-4⑧を消書したもの。
③	詩稿/共研噺社中/清 風	壬寅(明治三十五年) 之秋九月廿一日	六丁	櫻井桂村	天地人	回覧の覚え書きあり。
④	なし	壬寅八月三十日	三丁	大竹蔭逕	非常に詳 しい	
⑤	会主伏乞/共研噺社詩 稿/正	壬寅之夏日	六丁	櫻井桂村	天地人	

〔表2〕【請求番号1-7-6】 寸法24.3×16.6

	表紙	年月日	丁数	批閲者	添削記号 など	備考
	草稿/共研噺社	壬寅(明治三十五年) 夏六月	六丁	櫻井桂村	天地人	

〔表3〕【請求番号1-7-7】 寸法26.4×17.5

	表紙	年月日	丁数	批閲者	添削記号 など	備考
	「古反草稿」	明治三十四年	二十二 丁	なし		反故詩を使用した下書きというべきもの。

〔表4〕【請求番号1-7-8】 寸法23.7×15.9

	表紙	年月日	丁数	批閲者	添削記号 など	備考
	卅五年五月十日ヨリ卅 六年老月卅日迄/嚶求 噺社紀事	壬寅(明治三十五年) 夏六月	六丁	なし		16.4×12.0(最大)の紙片一枚(某君助 定不足)あり。

〔表5〕【請求番号1-7-9】 寸法23.8×16.0

	表紙	年月日	丁数	批閲者	添削記号 など	備考
	嚶求噺社宿題席題録		六丁	なし		

前稿別表

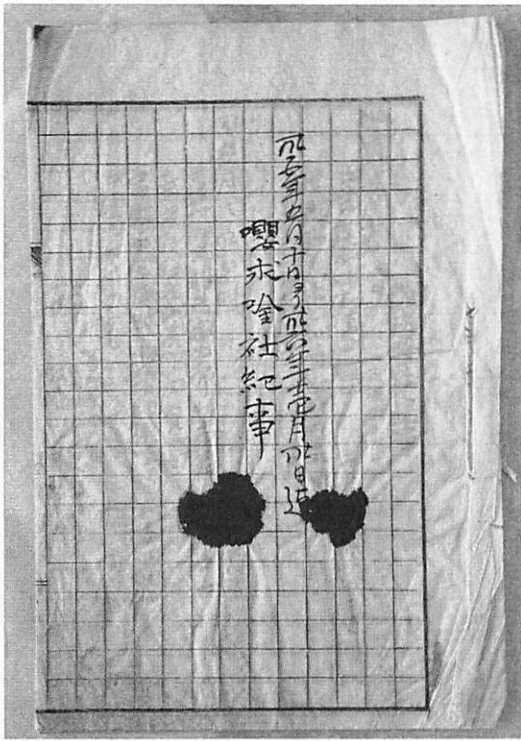
〔表2〕 1-7-3①備考追加 後半は1-7-4⑦を消書したもの。

〔表3〕 1-7-4①②備考 ×研客→○研谷



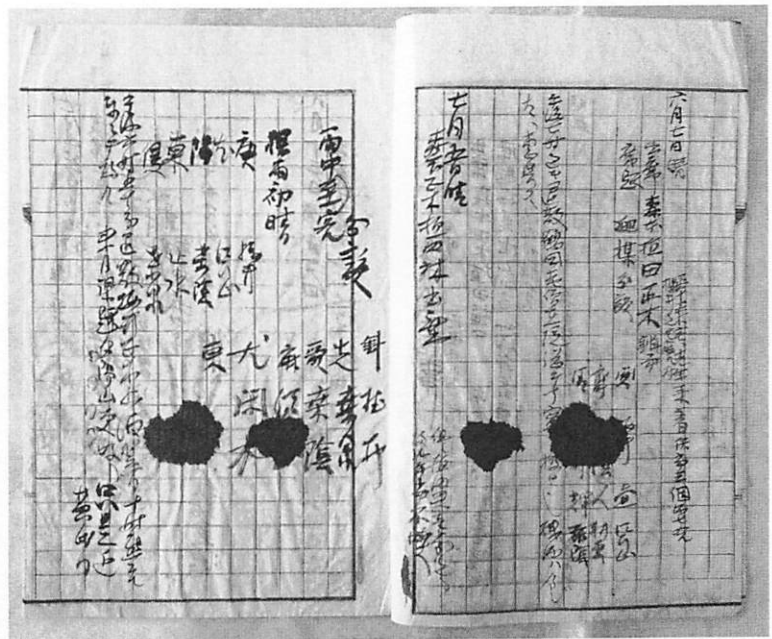
るのは自然なことに思われる。しかし蔣逕は共研吟社の人々とは縁がなかったようで、結果的に聳山たちを指導することになるのは櫻井桂村であった。

桂村を迎えるに当たって、新たな詩社である嚶求吟社が誕生した。この詳細を伝えるのが1778『卅五年五月十日ヨリ卅六年五月卅日迄 嚶求吟社紀事』(以下『嚶求吟社紀事』と記す)、1779『嚶求吟社宿題席題録』である。特に前者は嚶求吟社という詩社の各回毎の出席者名、席題・宿題などに始まって、弁当の数や用意した酒の量まで記された、実に興味深い写本なのである。



〔図4〕『嚶求吟社紀事』表紙

『嚶求吟社紀事』の記録は明治三十五年五月十一日曜日から記されているが、同日の席題の一つは「迎櫻井翁車駕」であり、『嚶求吟社宿題席題録』には聳山の七言絶句と桂村が次韻した詩が書き付けられている。



〔図5〕『嚶求吟社紀事』

歡迎人去又歡迎  
醉汲松泉石鼎烹  
杜宇何心厭餘興  
歸期頻促不休聲

歡迎人去り又歡迎  
醉ひて松泉を汲み石鼎烹る  
杜宇何の心ありてか余興を厭ひ  
帰期頻りに促して声を休めず

聳山

雅游又被故人迎  
林筍園蔬入割烹  
淡泊誰識多至味  
管弦孰與峙流聲

雅游又故人に迎へられ  
林筍園蔬 割烹に入る  
淡泊誰か識らん至味多きを  
管弦 流聲に峙するに孰れぞ

櫻井

初句に「雅游又故人に迎へられ」とあるように聳山と桂村は旧知の間柄である。桂村が添削した共研喰社の詩稿にはこの前年、明治三十四年の日付のものもあるので、共研喰社の人々は少なくとも作詩を通じて桂村のことを知っていた。しかし、この第一回の席題からは改まった雰囲気が窺える。まさに新たな詩社が誕生した瞬間であろう。時は五月、「林筍園蔬割烹に入る」とあるから、聳山たちは現在でも乙訓地方の名物である筍料理で桂村をもてなしたのである。

【喫求喰社紀事】の記録によると、この日参加したメンバーは「森本（桑泉）・正木（聳山）・植田（桑陰）・樋口（敬軒）」の四人（ただし「喫求喰社宿題席題録」には樋口敬軒の作品は記録されていない）で、詩会は桂村を加えた五人で開催された。桂村には膳を用意し、他の人々は弁当である。その他に五人分で酒を一升用意している。

酒の量は多少変化しているが一人当たり二合程度、桂村に膳、他

のメンバーは弁当というパターンはずっと変化がない。他日の記録などから、詩会はだいたい昼頃開始、六時前後に散会しようだが、五月十一日の項には

夜櫻井翁正木宅止泊翌十二日午前十時山崎妙喜庵帰ル

とあるから、桂村へのもてなしやおそらく膳や弁当の用意など詩会的一切を正木家を取り仕切っていたのであろう。

会場は近隣の社寺や特に記述のない時は正木家で行われたとみてよいだろう。【喫求喰社紀事】が聳山と思われる一人の筆跡で書き継がれていることから、もし他家が会場ならそのことを記すと考えられるからである。

費用は参加者から徴収したらしい。【喫求喰社紀事】には請求するための覚え書きが一枚挟まれているが、このように詩社に参加するために必要な金額が具体的に記された資料は非常に珍しいのではないだろうか。出席していない月も請求されているので、毎月ではなく盆と正月に集めたのかもしれない。八月が少ないのはこの人物が七月から参加しているためだろう。いずれにしても当時の一般人が気軽に払える額ではないと思われる。

某君勘定不足

三十五年八月勘定

一、金三十巻銭

卅五年十二月勘定

一、二円五十四銭六リ

卅六年八月勘定

一、三円五十銭

卅七年一月勘定

一、老円〇八銭

詩会の参加者は約四、五名で、この数字は少ないようだが、詩稿には作者として、また回覧した者の署名として多くの名前が挙がっている。詩社の形態は、詩会の常連、詩会には参加しないが指導を受ける常連予備軍や回覧のみの会員など、重層的な構造になっている。今後の課題として、それぞれのメンバーの動向を細かく追っていけば、詩社の構造がより詳しく浮かび上がってくるであろう。

## 5 櫻井桂村について

櫻井桂村は明治四十一年に上梓した『熙春堂詩鈔』(注10)の綿引東海(名は泰、東海は号)による序文に「今年七十五」とあるから、数え年なら文政十一年(一八二八)生まれである。宇田栗園・江馬天江と二、三歳しか違わないことになる。医者で詩を善くし、若い頃咸宜園に学んで都講となった。『熙春堂詩鈔』の跋文は秋月新太郎によるもので、桂村の為人について「翁、容貌魁偉にして善く飲み善く談じ、尤も経義に明るし」と記している。

桂村の場合も天江と同じく禁門の変による大火に遭い、その作品は烏有に帰した。門人が千余首あった相余の作から五百余首を選び、『熙春堂詩鈔』四巻が成ったという。ただし稿者は第一巻しか確認

していない。

その『熙春堂詩鈔』序文に次のようなくだりがある。

輓近、設詩社於城南、誘掖後進、亦足以知其老而志在也。

輓近、詩社を城南に設け、後進を誘掖す。亦た以て其の老いて志在るを知るに足る也。

この、桂村が「城南」、京都の南に開いた詩社というのは嚶求吟社を指すのではないだろうか。『嚶求吟社紀事』によると、詩会が持たれたのは

明治三十五年

五月	十一日	二十四日
六月	七日	
七月	五日	二十六日
八月	十三日	二十五日
九月	十三日	二十八日
十月	二十八日	
十一月	十五日	二十三日
十二月	六日	二十八日
三十六年		
一月	十五日	三十日

と一月に一、二回の頻度である。共研吟社が「毎月一たび集ひ、吟詠に従事し」(『西岡風雅』宇田泰序)と月に一度の集まりだったこと

と比較しても、かなり多いといえるだろう。

詩会以外にも、桂村は詩稿の添削をしていた。各詩稿の詩題と「嚶求唼社紀事」に記録された詩題とを照合すると、一致するものがなかった。添削指導は詩会で提出された作品とは別に行っていたことがわかる。

これだけの頻度で詩会を開催し、添削指導を行っていたことも考えると、綿引東海がいう桂村の詩社が他に存在するとは考えがたい。嚶求唼社こそが、「熙春堂詩鈔」に記された「城南」の詩社だと特定して間違いないだろう。

「熙春堂詩鈔」の奥付によると、桂村の住所は「京都府葛野郡朱雀野村字西ノ京小字野口町一九番地」となっている。現在の京都市下京区である。奥付は明治四十一年時点での情報だが、「嚶求唼社紀事」の三十五年十二月二十八日の項には「櫻井翁京都より同日午前正木へ来ル」とあり、17710の詩稿には「癸卯（明治三十六年）之春一月二十六日 関于城南千本寓居 桂村老人癸卯批」ある。桂村は京都在住で、嚶求唼社のために乙訓地方に出向いていたのだろう。

桂村は正木家に宿泊する他に乙訓の寺院を利用していたことが、正木彰家文書から窺える。「嚶求唼社紀事」の明治三十五年五月十一日の項には「夜櫻井翁正木宅止泊翌十二日午前十時山崎妙喜庵帰ル」、17715⑤の詩稿には「壬寅（明治三十五年）之夏日 妙喜庵中関之 桂村癸卯批」、17712①には「癸卯仲春第三日 関于妙喜庵寺窓下 桂村老人癸卯批」とある。この「妙喜庵」とは現在の京都府乙訓郡大山崎町にある臨済宗東福寺派の寺院、豊興山妙喜庵である。

また17714の詩稿には「甲辰（明治三十七年）一月二十八日 関于柳谷寓楼 桂村老人批」とあるが、17718に「別後寄同翁在楊谷寺（別後同翁（桂村）の楊谷寺に在るに寄す）」という辮山の七言絶句があるので、「柳谷寓楼」とは現在の京都府長岡京市浄土谷にある「柳谷観音」、西山浄土宗の寺院、立願山楊谷寺に違いない。

さらに17718には「櫻井翁見惠數詩次韻以呈（櫻井翁數詩惠まる。次韻し以て呈す）」という七絶の割注に「時在妙音山翁富吟曲故及（時に妙音山に在り。翁吟曲に富む故に及ぶ）」とあるが、この「妙音山」は大崎町にある真言宗系単立の寺院、観音寺の山号で、つまり山崎聖天である。「桂村翁來訪醉後歸于鷄羅山卒然賦一詩以呈（桂村翁來訪、醉後鷄羅山に帰る。卒然として一詩を賦し以て呈す）」という五言律詩もあるが、「鷄羅山」は歡喜天すなわち聖天のいるところであるから、これも山崎聖天のことであろう。こういった寺院との繋がりは、詩社の活動基盤を明らかにするための重要な手がかりの一つになりそうである。

ところで「嚶求唼社紀事」には、桂村への謝金についての記述が一箇所だけある。八月十三日第六回の項に

翌十四日先生帰驅謝儀金四円渡之

とあるのがそれである。これが一度の詩会の謝金なのか、他の添削料も含む額なのかはわからないが、詩会ごとの謝金だとしても、これだけで生計を立てるのは難しいと思われる。

桂村は明治四十二年以降に亡くなったらしい。その署名が確認されるのは17718の詩稿にある「己酉（明治四十二年）元旦のものが最

後である。この後1-7-18には「花時追悼桂村翁(花時桂村翁を追悼す)」と題する桂村の死を悼む詩が続いている。1-7-18は詩社ではなく、嵯山個人の詩稿なので、桂村が嚶求吟社の活動をいつまで続けたのか、はっきりした日時はわからない。嵯山自身は大正に入っても詩作を続けているが、嚶求吟社は明治という時代の終わり、桂村の死と共に解散したのであろう。

## 6 おわりに

以上、正木彰家文書の詩稿に見える共研吟社・嚶求吟社の主宰者や活動時期について、調査の結果明らかになったことを述べた。特にこれまでよくわかっていなかった詩社の主宰者については、共研吟社が宇田栗園、嚶求吟社が櫻井桂村に特定できた。

調査が進むにつれ、明治期乙訓地方の詩壇の状況が、かなり具体的に明らかになってきた。特に「嚶求吟社紀事」は、詩社というものが実際どのように運営されていたかを知る記録として非常に有益な資料であると考える。詩会に用意した酒の量や会費まで知ることのできる資料は、そうそうあるものではないだろう。

このような詩社の運営に関して知ることができるという点に於いても、正木彰家文書の詩稿は貴重な資料であるといえる。今回も別表にその情報を付した。先稿と併せ、多くの研究者の調査・利用を願っている。

## 注

- (1) 新稲法子「長岡京市正木彰家文書の詩稿について」(『上方文藝研究』第十号、平成二十五年六月十七日)
- (2) 長岡京市史編さん委員会編「長岡京市史」本文篇二 平成九年刊。
- (3) 向日市文化資料館所蔵。
- (4) 多田吉宏家所蔵。
- (5) 大阪府立中之島図書館蔵本による。
- (6) 合山林太郎「幕末・明治期における日本漢詩文の研究」(『序章』(和泉書院、平成二十六年)、六頁)。
- (7) 日浅忠行・吉野(旧姓宇田) 啓子「わたしの見つけた宇田家の人たち」(乙訓地名詩第二輯刊行記念文化講演会、平成二十六年二月二十二日於長岡京市中央生涯学習センター)による。なお、同氏によると宇田家には鶏冠井宇田家・長法寺宇田家・神足宇田家・聖護院宇田家があり、栗園は神足の出身で聖護院へ分家した。
- (8) 前稿の「表3」①②の「研客」は「研谷」の誤りである。
- (9) 大阪府立中之島図書館蔵本による。
- (10) 大谷大学附属図書館蔵本による。

(にいな のりこ／佛教大学・非)

編集後記

○今号に掲載した論考は、計7本。巻頭の濱田啓介先生稿は、話題の「西鶴をどう読むか」ワークショップにおける先生の全体講評を基にしたものであり、巻末の連載「上方文藝への招待」は、同ワークショップ以後の西鶴論議の動向を報告するものである。福田稿も、西鶴の「好色一代男」「おもくさ」に関するものであるから、最近の西鶴への熱い関心が本号に集約されて表れている感がある。

○連続性をもつ論考も目を引く。浅田稿は、氏が本誌第4号掲載論考において推測されたことを確定させる資料を提示しており、新稲稿は前号掲載論考に続けて、正木彰家詩稿より明治期京都における詩社の有り方を分析している。

○加藤稿は堀田友之の「宗匠家談話」を翻刻・解題したもの。有澤稿は、富川吟雪の草双紙が上方読本「垣根草」を典拠とすることを指摘するもの。山田稿は「以敬齋問書」における発音に関する記述を検討したもの。

○前号の第十号までをひと区切りとする認識が会員の皆様にも共有されていたのではないかと思う。とすると、今号(第十一号)の刊行は新たなゴールに向けてのスタートを切ることになる。順調に刊行できたのは、玉稿をお寄せくださった方々、厳正な審査をしてくださった査読の先生方のお蔭である。感謝の意を表したい。

○「上方文藝研究」の購読会員・執筆者(同人)になりたい方は、下記事務局まで郵便またはメールでお申し込み(お問い合わせ)下さい。購読会員の年会費は千円です。年一回刊行の本誌一部(送料は当会負担)をお送りいたします。執筆者は年会費六千円(学生は二千円)で、本誌二部を配布します。なお、執筆される場合、査読により原稿の採否を決定します。詳細は下記連絡先までお気軽にお問い合わせ下さい。

(康)

上方文藝研究会の会 同人(五十音順)

浅田 徹	天野 聡一	有澤 知世	飯倉 洋一	一戸 渉	伊藤 達氏
今井 亮輔	内田 宗一	海野 圭介	大橋 正叔	岡島 昭浩	尾崎 千佳
加藤 弓枝	神谷 勝広	川崎佐知子	川崎 剛志	川端 咲子	神作 研一
康 盛国	木越 俊介	衣笠 泉	金 昌 哲	合山林太郎	近衛 典子
島津 忠夫	程 瑜利	神明あさ子	管 宗次	勢田 道生	高橋 清久
高橋 雅彦	高松 亮太	富田志津子	仲 沙織	中井 陽一	永野 仁
新稲 法子	根来 尚子	橋本 孝成	服部 仁	浜田 泰彦	廣川 和花
福島 理子	福田 安典	正木 ゆみ	真島 望	松原 秀江	宮川 真弥
宮本祐規子	盛田 帝子	矢田真依子	山崎 淳	山田 昇平	山本 和明
米谷 隆史	筭田 将樹	鷲原 知良			

上方文藝研究 第十一号

平成二十六年(二〇一四)年六月二十日 印刷  
平成二十六年(二〇一四)年六月二十七日 発行

編集・発行 上方文藝研究会

〒五六〇-八五三三 豊中市待兼山町一-五

大阪大学文学研究科日本文学国語学研究室

Tel 〇六-六八五〇-一五一一

kamibunken@gmail.com

郵便振替 〇〇九二〇一四-一三〇四一〇(上方文藝研究会)

印刷 株式会社 ケーエスアイ